

平成の大合併前、十三湖は市浦村に属していた。当時、十三湖は地域の4分の1を占めていたから、市浦村は十三湖の村といえる。

同村は1955（昭和30）年に十三、相内、脇元の3村が合併して成立。2005（平成17）年に五所川原市や金木町と合併し、新たに五所川原市となって村名自体は消滅した。

市浦村の実質50年に及ぶ歴史は『市浦村史』に書かれていない。しかし、この50年の間に干拓事業が続けられるなど、十三湖にとっては重要な出来事があった。その一つが橋の架橋である。

十三湖は十三潟ともいわれ、水深は浅く湖口が狭い。十三から相内は目と鼻の先だが、橋がない時代は湖東の薄市や今泉まで迂回せねばならなかった。そのため湖口には渡し船があり、自動車も運んでいたが不便さ

は免れない。そこで市浦村出身代議士の三和精一が架橋を促進した結果、1959（昭和34）年8月に十三橋が完成する。

十三橋は木橋としては青森県最長で、全国でも有数の長さだった。橋の中央部

## 十三湖と十三橋と市浦村の記憶

中園 裕

（県民生活文化課

県史編さんグループ 主幹

には漁船が往来できる開閉式の可動橋が取り付けられていた。竣工式は1ヶ月後だったが、市浦村民は十三の砂山踊りを披露し、渡り初めをして橋の完成を祝った。十三橋は湖周辺の流通網を向上させ、市浦村の経済的發展に寄与した。だが橋と引き替えに渡し船は姿を消す。

1972（昭和47）年、市浦村は総合開発計画を策定し観光事業に力を入れ

る。3年後には津軽国定公園が設定され、十三湖も公園内に組み込まれた。十三橋が観光に果たした役割は大きかったろう。しかし市浦村の経済的發展に伴い、十三橋には自動車が頻繁に通過。架橋後20年が経過して老朽化も目立っていた。

そのため1979（昭和54）年10月、十三橋の西寄りに永久橋である十三湖大橋が架けられた。

大橋架橋の翌年に十三橋は解体された。しかし1984（昭和59）年9月、十三湖北側の中島に、十三橋を模した中島遊歩道橋が架けられた。木橋であるため、2011（平成23）年3月に資材を新改築しているが、外観は架橋当時の姿をとどめている。十三橋は津軽国定公園内を結ぶ橋として生まれ変わったのだ。

十三湖大橋を北に渡り十

三北口のバス停から少し南へ進むと、湖岸に三和精一の顕彰碑がある。この場所は十三湖北側の渡り口だった。現在の十三湖には、渡し船や十三橋の形跡は残っていない。三和の顕彰碑と中島遊歩道橋は、渡し船や十三橋があった時代の十三湖を知る貴重な歴史的建造物なのである。



十三湖大橋の開通式。村民は大橋（写真右）の完成を喜んだが、十三橋（写真左）にも愛着を寄せていた。1979（昭和54）年10月13日撮影・県史編さんグループ所蔵。